

氏名(本籍地) 海野裕子(茨城県)  
学位の種類 博士(学術)  
学位記番号 博甲第62号  
学位授与年月日 平成24年3月16日  
学位授与の要件 昭和女子大学学位規則第5条第1項該当  
論文題目 現代青年における「ひとりの時間」の持つ意味  
—自我同一性形成との関連に焦点を当てて—

論文審査委員 (主査) 昭和女子大学教授 三浦 香苗  
(副査) 昭和女子大学教授 島谷 まき子  
昭和女子大学教授 今城 周造  
東洋大学教授 堀毛 一也

## 論文要旨

本論文は、「ひとりの時間 (*time to be alone*)」を「心理的にひとりである、単独であると感じられる時間(ただし、他者の存在や行為遂行の有無は問わない)」と定義し、現代青年の「ひとりの時間」の持つ意味を自我同一性との関連で検討した論文である。

論文は5章から構成されている。第1章では、「ひとりの時間」と現代青年期について文献研究を行っている。さまざまな研究(「居場所」・「ひとりでいられる能力」等)から、「ひとりの時間」には、自分自身と向き合い、自己を確立していく場としての側面があり、充実した「ひとりの時間」を持てるようになることが、青年の発達(自我同一性形成)にとって重要であると考察している。

第2章では、大学生を対象に「ひとりの時間」に関する探索的研究の結果を報告している。自由記述の分析から、大学生は「1人」という言葉に対して否定的イメージ(孤独・さびしいなど)だけでなく、むしろ様々な肯定的イメージ(リラックス・自由・気楽・考え事など)を抱いていることを明らかにしている。また、ひとりで過ごす状況を、自分の意志であえてひとりで過ごす場合(「能動的なひとり」とひとりでも過ごすしかない場合(「受動的ひとり」))に分けて検討し、「能動的なひとり」の場合には、ポジティブな気分が過半数ではあるが、ネガティブな気分・アンビバレントな気分・ニュートラルな気分など様々であることを報告している。

第3章では、男女の大学生における「ひとりの時間」について、多肢選択方式の調査から検討している。まず、尺度の作成を行い、ひとりで過ごすことに関する感情・評価は「孤独・不安」・「自立願望」・「充実・満足」の3下位尺度、「ひとりの時間」の過ごし方は「休

息・解放」・「自己内省」の 2 下位尺度から構成されることを示している。そして、「ひとりの時間」と自我同一性との関連を明らかにするために、「ひとりの時間」の過ごし方が、ひとりで過ごすことに関する感情・評価に影響し、それが自我同一性に影響するというモデルを仮定し、パス分析によって検証している。また、ひとりで過ごすことに関する感情・評価および「ひとりの時間」の過ごし方は、友人に対する感情とも関連していることを明らかにしている。さらに、感情・評価の 3 下位尺度を基にしたクラスター分析により、①「孤独・不安」が高く「自立願望」・「充実・満足」が低い群（ひとり不安群＝ひとりでいられない）、②「孤独・不安」が低く「自立願望」・「充実・満足」が高い群（高自立願望群＝ひとりでいたい）、③「孤独・不安」が低めで「自立願望」が低く「充実・満足」が高めの群（適応群）を抽出している。そして、それぞれの群によって、対人恐怖心性、自我同一性、友人に対する感情が異なること、および「ひとりの時間」の過ごし方が異なることを示している。具体的には、①ひとり不安群は、対人恐怖心性が高く、自我同一性が低く、友人に対する感情が不安定、②高自立願望群は、集団に溶け込めない心性が高く、自我同一性は低めで、友人に対する感情はやや安定、③適応群は、対人恐怖心性は低く、自我同一性が高く、友人に対する感情は安定しているという特徴を明らかにしている。また、ひとり不安群は「休息・解放」・「自己内省」の過ごし方の頻度が低く、高自立願望群は「休息・解放」・「自己内省」の過ごし方の頻度が高く、適応群は「休息・解放」の頻度は中程度で「自己内省」の頻度は低いという結果を得ている。

第 4 章では、中・高・大学生の女子を対象に質問紙調査を実施し、青年期における「ひとりの時間」の発達の变化について検討している。ひとりで過ごすことに関する「孤独・不安」は学校段階が上がるにつれて低くなるが、「自立願望」・「充実・満足」は高くなるという発達の变化があることを示している。また、「ひとりの時間」の過ごし方としては、「休息・解放」・「自己内省」ともに学校段階が上がるにつれて高くなることを示している。次に、自我同一性との関連を明らかにするために、第 3 章で作成したモデルを基に多母集団同時分析を行った結果、適合度の高いモデルが得られ、第 3 章で作成したモデルの有効性を確認している。なお、影響の仕方は各学校段階で異なっていることを報告している。また、クラスター分析により、低自立願望群、高自立願望群、ひとり不安群、適応群、中程度群の 5 群を見出している。第 3 章で得られた 3 群に加え、まだ自立願望を持たない低自立願望群と、適応群までは発達していない中程度群が加わったと推測している。

第 5 章では、第 1 章から第 4 章までの検討をふまえ、本研究の総括を行い、充実した「ひとりの時間」を持つための提言を行っている。それらは、①友人との関係がポジティブで安定したものになること（対人関係の構築）、②ひとりでも過ごせるようになりたいという「自立願望」を持ち、現実に試行錯誤しながらひとりで過ごす体験を積み重ねること（「ひとりもいい」と思える体験）、③自分にとってちょうど良い「ひとりの時間」と他者と過ごす時間のバランスを知り、自分なりの「ひとりの時間」の持ち方を獲得していくこと（自他のバランスの把握と構築）が重要であるとまとめている。そして、最後に、本研究の限

界と今後行うべき研究課題を述べている。①本研究で作成されたモデルを確認し精錬させていくこと、②発達的变化について、男性も含めた検討を行い、男女差や女性の独自性を明らかにすること、③本研究は横断的研究であったが、縦断的研究や面接調査を通して、1人の人の中での、ひとりで過ごすことに関する感情・評価および「ひとりの時間」の過ごし方の発達的变化の詳細を明らかにしていくこと、④ひとりでいられない人や、ひとりでしかいられない人に焦点を当て、そのような人にとっての「ひとりの時間」のあり方を検討し、臨床的支援に役立てていくこと、⑤対人関係の感情面だけでなく、実際に友人とどう関わっているかという行動面と関連づけて「ひとりの時間」を捉えること、⑥日本と同様に急激に変化している韓国や中国等では、ひとりで過ごすことや自我同一性をどのように考え、どのように伝統的価値との折り合いをつけているのかについて比較文化的研究をすること等が必要である、と結んでいる。